

リードするドコモのバイクシェアリング

2018年は、バイクシェアの新しい時代の始まりになるのでは、と予測されるほど市場の動きが活発になってきました。東京都内の4区連合（中央、千代田、港、江東）で、2016年2月にスタートしたドコモバイクシェアリングは、新たに新宿、文京、品川、大田、渋谷、練馬とサービスエリアが増え、それ以外では横浜、仙台、広島など地方都市へと広がっています。本年5月に施行された自転車活用推進法の基本方針に示された「シェアサイクル施設の整備」が自治体の取り組みを後押ししたこともあり、各観光地などでも、ドコモバイクシェアリングのシステム導入が急速に進んでいます。

シェアサイクル市場に続々と名乗りをあげる新規参入企業

快調に市場拡大を進めるドコモに対して、今年、中国のシェアサイクルの大手二社が相次いで日本市場に進出しました。8月に札幌市でサービスをスタートした、世界最大の「モバイク」と、同じくソフトバンクと提携し、東京都と大阪市でバイクシェアサービスを展開する計画を発表した「ofo」です。

中国からの進出に呼応するかのよう、国内企業の動きも活発になってきました。まず、シェアリングエコノミーで急成長している「メルカリ」が、シェアサイクル「メルチャリ」で2018年からのサービス開始を発表しました。今後も新たにシェアサイクル市場に参入する企業が、増えるものと予想されます。

2018年、一気に競合が加速するシェアサイクル市場



電動アシスト対一般自転車によるサービス競争激化

先行するドコモバイクシェアリングの自転車が電動アシストであるのに対して、後発の各社は、アシスト無し的一般自転車です。東京都内の広域サービスにはアシスト付の方が便利ですが、ポート用地の確保、ラックと課金用機器の設置、充電の手間などで、時間とコストに課題があります。その点、スマホ

だけで借りる、返却が可能な一般自転車の場合、ポートさえ確保すればよいので、事業開始までの時間とコストを大幅に削減できるメリットがあります。同域内で競合が進むと利用者にとって選択の幅も広がり、サービス競争によってサービス料金の低下も起きるでしょう。シェアサイクル市場は、東京五輪パラリンピックに向け、戦国時代突入の様相を呈してきました。



「サイクルモードインターナショナル2017」から見えてきたこと。



11月3日から3日間、幕張メッセで開催された、日本最大級のスポーツ自転車フェスティバル、「サイクルモードインターナショナル2017」取材してきました。年々スポーツ自転車熱が高まるなか、今年で13回目の開催になります。

会場は大小に分けられ、小会場では主に、スポーツ車を展示。大会場では、関連商品などのさまざまなグッズや、自転車ツアー案内など自転車ライフを豊かにする企画がぎっしり展示されていました。総展示台数が1000台を超える新車の試乗イベントには、長い列ができ、連休の初日とあって、会場は、小学生、若者、高齢者、家族連れ、女性だけのグループなどであふれ、スポーツ自転車への人気の高さと底辺の広がりを感じさせます。

今回は電動アシスト自転車の進化と自治体による自転車活用のイベントを中心に絞って取材してみました。というのも、電動アシスト自転車業界が、子乗せタイプの需要が頭打ちになったことから、新たに若者向けに新しい商品開発する動きがあるという情報を耳にしたこと、もう一つは、本年5月1日に施行された、自転車活用推進法を受けて、自治体の観光とまちの活性化への自転車活用の動きをこの目で確かめたかったからです。



会場を埋める自転車ファン

進化する電動アシスト自転車。

予想は裏切られませんでした。電動アシストは、スポーツ車はもちろんのこと、一般自転車、そして小型自転車にも搭載され、形もデザインも洗練されています。電池も小型化が進みフル充電での走行可能距離も伸びています。中でもスポーツ自転車は、将来、このタイプによるツールドフランスのような自転車競技が開かれるのではないかと思えるほどでした。価格帯は、平均で10万円から15万円です。スポーツタイプは20万円と高額ですが、利便性ばかりを重視した時代から誰でも気軽にツアーを楽しめる時代へと、電動アシストは文字通り、利用者をアシストしてくれる自転車としてこれからいっそうの普及が期待できます。



電動アシストスポーツ自転車

観光地の活性化に自転車旅への期待

自治体や観光地の出展ブースにも人だかりが絶えません。ブースの数は、北海道から沖縄まで25にのぼり、観光地を自転車でめぐるとツアー企画を中心に知恵を絞っています。ここでもNPO BEENが提唱する自転車活用の5K（環境、健康、交通、観光、活性化）の観光、活性化に各自自治体が期待を高めていることがうかがえます。一方、自転車メーカーも、自治体、観光地の動きに合わせるように、列車に積める折りたたみ自転車の開発に力を入れており、自転車業界と鉄道、自治体、観光地が一体となった鉄道旅という、あたらしい旅のジャンルがいよいよ本格的に動き始めることでしょう。（末吉正三）



輸行用の折りたたみ自転車



にぎわう観光地、自治体ブース

スポーツ自転車利用者にイエローカード？

一般社団法人自転車協会がスポーツ自転車利用者500人を対象に行った意識調査によると、「メンテナンス不足による故障トラブルを経験したことがある」と回答した人が全体の73.6%にのぼったそうです。さらに2人に1人はメンテナンスを「ほとんどしていない」「まったくしていない」という実態も明らかになりました。調査は、スポーツバイク（ロードバイク、クロスバイク、マウンテンバイク、小径車・折りたたみ車）を保有する全国の20歳～59歳の男女・年代で均等に割付けた500人を対象に実施しました。

スポーツ自転車利用者は年々増加しています。性能の高いスポーツ車は、一般自転車以上にメンテナンスが求められます。大きな事故につながりやすいことからメンテナンスの重要性をもっと自覚してもらいたいものです。

メンテナンス不足が原因で故障トラブルを経験したことがありますか？



自転車活用推進計画の策定スケジュール(案)

平成29年5月1日に施行された「自転車活用推進法」の具体的な活用推進計画の策定(案)が国土交通省から発表され、概ね平成30年夏までに閣議決定されることが決まりました。平成25年12月自転車活用推進議員連盟の提言からスタートして5年で、いよいよ推進法が本格的に動き始めることになります。

自転車活用推進法に関する経緯

- 平成28年 12月9日 **自転車活用推進法の成立**
- 12月16日 自転車活用推進法の公布
- 平成29年 3月17日 自転車の活用の推進に関する業務の基本方針(閣議決定)
- 4月25日 関連政令の改正等
- 5月1日 **自転車活用推進法施行**
- 6月13日 第1回自転車活用推進本部会合
- 平成30年 夏までに **自転車活用推進計画の閣議決定**

自転車の思い出話を「BEEN通信」で披露してみませんか。

会員の皆さんの自転車に関する思い出話を募集します。自転車に初めて乗れた時、初めて自分の自転車を買ってもらった時、自転車旅行等々「私の自転車の思い出」を原稿用紙1枚程度にまとめて下記メールもしくはFAXで応募してください。応募して頂いた思い出話は、「Been通信」に掲載します。

宛先 NPO 通信 事務局 須藤
 メール sudo@npo-been.com
 FAX 03-5793-4347



私がアメリカ大陸を自転車で横断しようとしたのは単に自転車が好きだったからではない。長野冬季オリンピックの最大のテーマが「環境」だったから、次の開催地である米国ソルトレーク・シティへ環境保全を呼びかけようと思ったメッセージは「環境親書」と呼ばれ、それを化石燃料を使わないで自転車で運ぶ私を「環境特使」と呼んだ。私を支援するために組織された「NASL国際環境使節団」のモットーに私は「もったいない」「我慢する」「思いやり」の三つをお願いした。

だから、ただ走るだけでなく、日本でもアメリカでも、通過する土地の知事、市町村長のすべてから「私たちは地球環境を守ることに協力します」という誓と署名を書いていただいた。訓練のため走ったモンゴルではバガバンデイ大統領も応じた。首長たちは前もって連絡を受けた日に待ち構えて快く対談してくれ、私のことを「スペシャル・アンバサダー」と呼んだ。

東京港から太平洋へ出航した1999年春には当選したばかりの石原都知事を訪問して「相変わらずバカばかりやっていますよ」と冗談を言ったら、私がフィリピンから日本まで竹のイカダで漂流冒険した前歴を知っている彼は「いやあ、オレもバカなことをやってしまったよ」と知事に当選したことを言った。後になってみると、石原知事を待ち受けていた都政のさまざまな困難を自

ら予測したような発言だった。

ネバダ州のユーレカに着いた時はアメリカ独立記念日の前日だった。ここに交代で応援伴走しようとして日本から団員5人が駆けつけた。私と息子に加えて一挙に7人になった。皆で市長にあいさつに行くと「明日の独立記念パレードにぜひ参加してほしい」と頼まれた。私の脳裏をちらっとかすめたのはサンフランシスコを出発する時に市警が言った忠告だった。「ネバダは原爆の実験と廃棄物で食っている。環境保全などと言ったら遠い所から弾丸が飛んでくるぞ」。



ユーレカでの独立記念パレード

日本男児がここで臆してなるものか。翌日は快晴。私たちはパレードの先頭に立った。黄色いジャンパーのNASL制服で自転車に乗り、真っ先に息子が緑色の団旗を翻して歩いた。スピーカーが私の渡した原稿を流している。「CO₂で空気を汚さないため、地球の裏側からはるばる自転車だけでやって来ました」。周囲を取り巻いた市民たちは口笛

と喚声で歓迎してくれた。

「どうということ、ないじゃないか」ほっとした私は続くアナウンサーのアドリブを聞いて苦笑してしまった。「真ん中の白髪の男が長野から来た市長です」と私を紹介したからだ。

(つづく)



サイクルモード 2017 と 佐倉美術館



幕張メッセで行われた自転車の展示会サイクルモード2017(11月3日～5日)と佐倉市美術館で開催されている「自転車の世紀」を見学してきました。

サイクルモード2017ではメーカー、自治体、健康食品メーカーなど191の団体が出展していました。出店内容は・自転車の最新トレンド・自転車での旅行をテーマに各地からの誘致・試乗・自転車教育・自転車用品、健康食品など様々でした。

なかでも注目を集めたのは「e-bike」というロードバイクに電動アシスト機能が付いた自転車や、JR東日本が展示をしていた、電車の中に自転車を運べるサイクルラックを用意したデモでした。2018年1月から試験的に千葉の内房線や外房線など一部の電車で使用できるようになるとの事です。

今回の目玉の一つが、新商品をいち早く試乗できると言う事で、イベント参加者がロードバイクの試乗をしているのが印象的でした。

試乗する前のレッスンコーナーや初心者を対象としたロードバイクの乗り方、子供を対象とした、「親子で考える自転車教育」も開催されていました。今回は駐輪機器は展示に出していませんでした。

佐倉市美術館で開催されている「自転車の世紀」は、自転車の歴史と初期の自転車展示から、身障者向けの手漕ぎ自転車、震災後に開発された20ℓポリタンクをフレームに積める自転車、ヨーロッパの100kgの荷物を積める自転車、未来型等々が展示され印象的でした。

描かれた自転車コーナーでは、歴史上描かれた、西洋画、日本画と最近流行の自転車アニメを展示しておりコンパクトではあったが有意義な展示でした。



ヨーロッパの100kgの荷物を積める自転車

